［研究ノート］

木下河岸と利根川舟運
―絵図や引き札にみる旅客河岸としての繁栄―

松丸明弘

はじめに

利根川の取手から下流に木下というところがあり、そこに河岸があった。木下と書いて「きおろし」と読む。赤松宗旦の『利根川図志』(1)には、

木下河岸　竹袋村の内なり。常総軍記巻二十いわく、今木下という名高き所、下利根川の岸にあり。是は竹袋より利根に木を下すの名なり。木下といえば、江戸にも隠れなく、竹袋と言うは、知る人無し云々。この地わずかに十軒ばかりなりしが、寛文のころ、この處に旅客の行舟（世に木下茶船という）を設けたるによりて、はなはだ繁盛の地となれり。そは鹿嶋、香取、息栖の三社に詣し、及び銚子浦に遊覧する人多かればなり、問屋七郎左衛門この番船を預かり、旅人の煩労をたすく。……（後略）……(2)

とあり、木下河岸はわずかに十軒ばかりの小さな村であったが、寛文年間（一六六一～一六七一）に旅客のための川船を運航するようになり、繁盛したと記されている。

この木下河岸は、百以上あった利根川の他の河岸とは異なり、旅客河岸という役割を持っていた河岸であることで知られている。本稿ではこの河岸の概要と特徴について、特に史料として残された絵図や引き札から考察を加えたいと考える(3)。

一　『船鑑』にみる木下茶船

前掲の『利根川図志』に、木下河岸で旅客の輸送に用いた船は「木下茶船」であると記されている。近世において、関東一円は多数の川船が就航していたが、これらの川船から租税徴収をおこなった幕府の川船役所が、管下の船を識別するために作成した図面集として『船鑑』(4)がある。このなかには、日本各地で使用された川船の横からの姿を描いたものが三十三隻分掲載されており、たいへん貴重なものとして知られている。このなかに「木下茶船」が掲載されている(5)。それが図1である。

この船は、『船鑑』には「房丁茶船」と名付けられて、図面の右上に次のように書かれている。

上口凡　長三丈二尺より三丈五～六尺まで
　　横六～七尺
下利根川通にこれあり。但し、形小さくて図のごとく胴の間に戸棚あり。是を耕作舟という。
江戸往来これなく下利根川通木下河岸より下も川通船
但し書きには「耕作舟」とあり、人や荷物を運ぶ耕作船とし

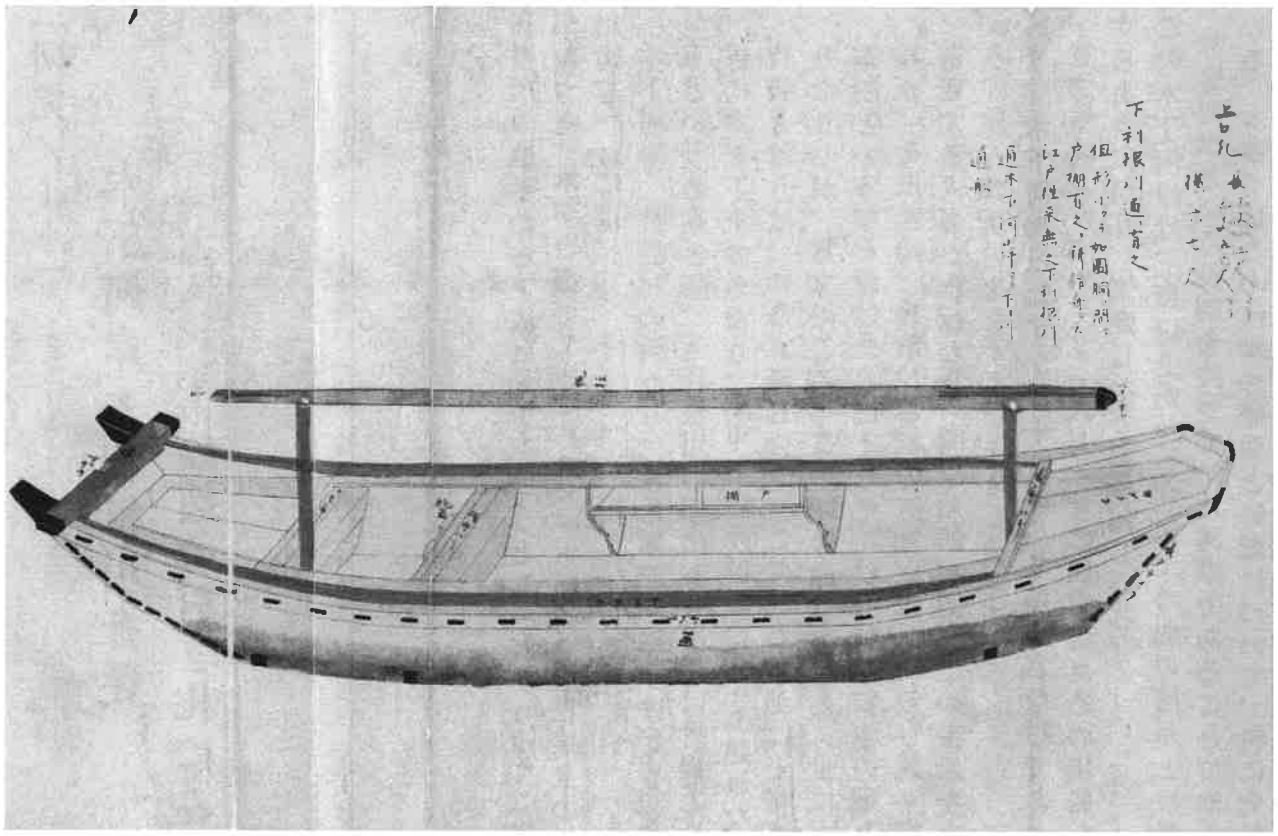


図１　木下茶船（出典『船鑑』（船の科学館、2013 年））

て使用された船が、茶船、つまり客船として使われるようになったのであろう。

船には「帆柱」と書かれて柱が中央の収納部分に倒されている。この柱を「柱筒」と書かれた部分に差し入れて帆を張って航行したと考えられる。帆走でなければ下流からのぼってくることはできない。また、図面に「戸棚」と書かれてある奥まった場所があるが、これは乗客の荷物を置いておくためのものだったのであろう。船は、現在のメートル法で換算するとおよそ長さ九メートル六〇センチから一〇メートル八〇センチほどのもので、幅は二メートル前後と記されている。

船首部分をみると、水をきって進むための「ミオシ（水押）」がない。船首の構造は、船首に「タテイタ」と記されていることからも大型の高瀬船と同じ、「立板造」である。この船が、海ではなく川だけを航行したことを示している。船の側面は、一枚の木材で構成された「棚造」である。木下茶船は一枚棚であり、大型化するに従って二枚棚、三枚棚となっていく。川名氏は構造上、一枚棚は立板造と関係が深いことを指摘されている(6)。高瀬船にみられるような「セイジ（世事）」と呼ばれる部屋はみられない。また、船の方向舵である舵がついていない。高瀬船や艀船（ひらたぶね）には舵がついている(7)。このことについて、川名氏は、着脱可能な舵を取りつけることのできる船であり、その場所が船体の後尾の「マリロ」と絵図に書かれている部分であったことを指摘している(8)。

また、船は八人乗りであった。「諸所附類ならびに旧記書抜仁ノ巻」という史料に

右茶船渡世仕来之儀者前々より書上ケ候通り壱艘八人乗りと相定……（後略）……(9)

とあり、また、絵図に記された船の長さからも八人乗り程度の船であることが推定できる。

二　木下茶船の遊覧先と活動範囲

この木下茶船に乗った旅人たちはどこに向かったのであろうか。『利根川図志』には、「鹿嶋、香取、息栖の三社に詣し、及び銚子浦に遊覧する(10)」とある。

三社とは、鹿島神宮、香取神宮、息栖神社のことである。

最初の鹿島神宮は茨城県鹿島市にある常陸国の一の宮に相当する神社で、旧社格は官幣大社(11)で、全国の鹿島神社の総本宮である。祭神は武甕槌大神（たけみかつちのおおかみ）である(12)。

二番目の香取神宮は、千葉県香取市にある下総国の一の宮として、古くから人びとの信仰を集めてきた神社で、旧社格は、これも同じく官幣大社である。武徳の神として鹿島神宮と並び称される。関東地方を中心として全国にある香取神社の総本社である。祭神は経津主大神（ふつぬしのおおかみ）である(13)。

三番目の息栖神社は茨城県神栖市息栖にある神社である。三社の祭神について、鹿島神宮が武甕槌大神、香取神宮が経津主大神で、この両神が天照大神に派遣され、出雲の大国主神（おおくにぬしのみこと）に対して国を譲ることを交渉し、成功した神々として知られている。いわゆる国譲り神話に登場する祭神である。この両祭神を案内したのが、息栖神社の祭神である久那戸神（くなとかみ）である(14)。

江戸時代には「下三宮参り」と称して、関東地方の人びとが伊勢神宮参詣などとともにこれら三社を巡拝する慣習があったことが知られているが、この三社参りに木下河岸は重要な役割を果たしていることがわかる。この三社巡りの遊覧船が木下河岸より定期的に出ていたことになる。

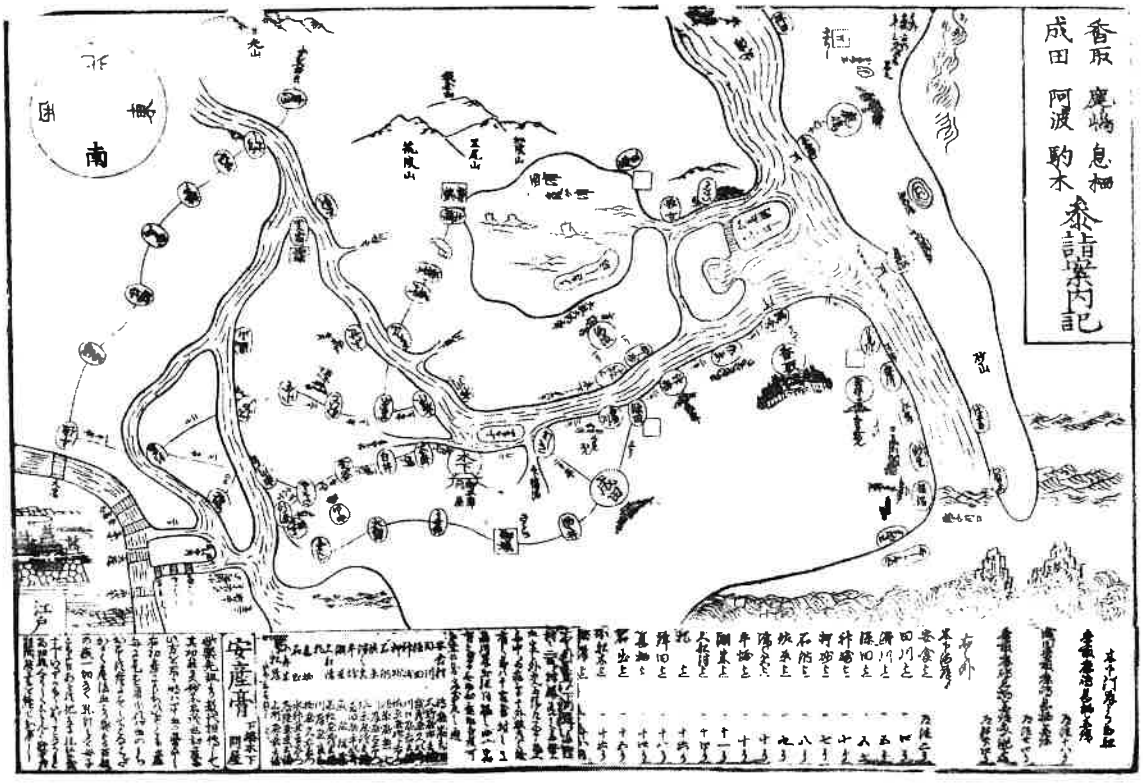


図２　三社参詣案内記（吉岡重弘家文書）（印西市立木下交流の杜歴史資料センター提供）

木下河岸で長く河岸問屋を営んでいた吉岡家の古文書のなかに「香取 鹿嶋 息栖 成田 阿波 駒木 参詣案内記」とする絵図がある。それが図2である(15)。

まず、東西南北の方角が絵図の左上に記されていて、ランドマークとなる山々が描かれている。ここでは、筑波山、足尾山などである。奥には日光山も描かれている。そして利根川と江戸川の流路が描かれている。江戸川は下利根川流域を中心に描かれており、霞ヶ浦（西浦）や北浦が利根川と結びついて描かれている。東は太平洋である。

絵図の南西に江戸と江戸城が描かれている。丸印で囲っているのは、宿場や河岸場である。

宿場は線で結ばれているが、これは街道である。千住から北に延びるのが日光道中、松戸から土浦方面に延びるのが水戸街道、市川や行徳から木下へつながっているのが木下街道、行徳から八幡、船橋、うすい、佐倉へとつながっているのが佐倉道、佐倉道はさらに酒々井から成田へとつながっている。また、成田は源田河岸や安食河岸ともつながっている。松戸から布佐につながっているのが鮮魚街道とよばれた「布佐みち」である。「布佐みち」は松戸から柴崎までは水戸街道の一部として描かれている(16)。

絵図には宿場間の距離が記されている。城下町である関宿、佐倉、土浦には御城という字を四角で囲んである。

前述の鹿島神宮、香取神宮、息栖神社の三社は図中の鳥居とともに社殿を記したマークを添えて描かれている。

船で航行した後、どの河岸で降りるかがわかる。鹿島神宮へは大舟津河岸、香取神宮へは津ノ宮河岸、息栖神社には特にもよりの河岸は記されていない。

また、この案内図の表題には、赤松宗旦の『利根川図志』に紹介されている三社以外に「成田」、「阿波」、「駒木」と記されている。

最初の「成田」とは、成田山新勝寺のことである。「お不動様」として知られ、平将門の乱平定の祈願のために派遣された寛朝の開山縁起を持つ古刹である(17)。現在も全国屈指の参詣者を誇っている。

「阿波」とは「アンバさま」で有名な大杉神社のことであろう。図中にも利根川と西浦の間に「阿波」と丸で囲まれた所である。大杉神社は正式には阿波本宮大杉神社といい、茨城県稲敷市に所在している。社名の由来となった杉の大木が境内にある。利根川にとどまらず、鬼怒川、小貝川をはじめ、これらに注ぐ多くの川の流域や各河岸に通じる街道周辺で河川交通に携わる人びとの航行安全の神として信仰されてきた神社である(18)。これも木下河岸からの観光地の一つとして組み込まれている。

「駒木」は水戸街道の「小金」と「あびこ」の間に「駒木　スワ」と記されており、社殿のマークが添えられているところがある。これは流山の諏訪神社であろう。実際の場所と案内図の記した場所はややずれているようである。実際の諏訪神社は水戸街道沿いにはなく、北側に位置している(19)。諏訪神社は、千葉県流山市駒木にある神社である。地元では「おすわさま」として親しまれている。境内には「諏訪神社遺跡」が存在しており、縄文時代後期から人が居住していたことがわかっている。社伝によると、天武天皇の皇子である高市皇子の後裔が移住し、この地を永住の地と定め、当地開発の守護神として、信州（長野県）の諏訪大社から分祀・創建されたとされている。祭神は武御名方命（たけみなかたのみこと）である。源義家や源頼朝の伝説が伝えられる「鞍掛の松」の碑などもある(20)。

また、案内図をよくみると、諏訪神社の北方の「ふせ」という河岸場のすぐそばに「弁天」と記されている所がある。これは布施弁天であろう。正確には布施弁財天で、東海寺という真言宗の寺院である。布施村に河岸があり、対岸の戸頭村を結ぶ

七里が渡しという渡船があって、往還河岸としても栄えた場所であった(21)。

他にも絵図上に「くわんのん」とかなで表記された箇所があり、信仰対象が表示されている。

この絵図は、縮尺はかなり違っているが、現代の鉄道路線図のように宿場や河岸のつながりはたいへんよくわかり、優れた絵図に仕上がっている。現在、テレビやネットで紹介されているパワースポット巡りに登場する神社仏閣のなかにこの案内図にはないものがある。その意味では、江戸時代の人びとの信仰対象を知ることができて興味深い。

さらに案内図には木下河岸から出船先への距離が記されている。「香取鹿嶋息栖参詣　道法二四里」、「成田香取鹿嶋息栖参詣　道法十八里」、「成田香取鹿嶋息栖参詣　道法二四里」などと記され、右の外として「木下河岸より安食まで道法二里、田川まで道法四里」などとある。茶船が様々な河岸に途中停泊し、旅行客を乗降させていたと考えられる。また、宿屋紹介もおこなっている。三社巡りは日帰りでは到底できる旅行ではないので、日が暮れる前にはどこかの宿で泊まることになり、そういう施設がこの地域に用意されていたことになる。

また、自家薬として吉岡家で販売されていた「安産膏」と呼ばれた薬の広告が紙面の左下に掲載されている。

江戸時代は士農工商という言説で広く知られるように、身分が固定され、生まれた土地で外に出ることもなく過ごし、一生を終えるようなイメージがあったが、この案内図を見る限り、平和な江戸時代を謳歌し、現代人と同じように旅行を楽しもうとする人びとの姿を想像することができる。

また、この絵図から木下河岸からの茶船を利用した人びとの行動範囲を知ることができる。東は銚子まで、北は北浦の南半分、西は江戸川を越えて江戸城まで描かれている。

江戸からは、木下河岸までの陸路が描かれている。丸印で囲んで主な宿場を記し、宿場や神社仏閣までの距離が記されている所がある。この案内記が江戸からの旅行客を対象とし、江戸を視野に入れて描かれていることがわかる。江戸から多くの人びとがこの木下の地に足を踏み入れ、船旅を楽しんで、人気の社寺に参詣していたのである。

三　旅行客の様子と旅客船の運賃

木下茶船を経営していた河岸問屋の吉岡家の史料に当時の河岸問屋の様子が描かれている史料がある。引き札、現在のチラシのようなものである。右側は年始の挨拶で始まり、「木下河岸　問屋七郎左衛門」と名前が記されている。

引き札の挿絵には、河岸問屋吉岡家で船を待つ多くの旅行客の姿が描かれている。玄関に大きく問屋と書いた提灯と「安産膏」という吉岡家で販売している薬の名前を記した衝立が置かれている。客室が待合室の役目を果たしているのか、広いのが特徴であり、それが挿絵からわかる。多くの参詣客が船を予約し、船が出発するのを待っている。右手に刀を持った武士の姿がみえる。左手では刀は抜けないので武士は家に上がるときには右手に持ち替えている様子がわかる。玄関先には十文字槍を立てた家来が荷物の前で番をしている。畳敷きと思われる左右の部屋では何人かのグループごとに空いた場所に坐って船の出発の番を待っている様子である。子供や女性の客の姿もみえる。向かって左手には荷物が庭に置かれて荷置場になっており、本来の物資輸送にも従事していることがわかる(22)。

挿絵の下には木下河岸よりの運賃が記されている。図2の「参詣案内記」は他の河岸や神社仏閣までの距離が記されていたのに対してこの引き札は運賃となっている。これらをまとめたのが表1である。

最初に三宮巡りのツアー料金が示されており、次に三宮巡り

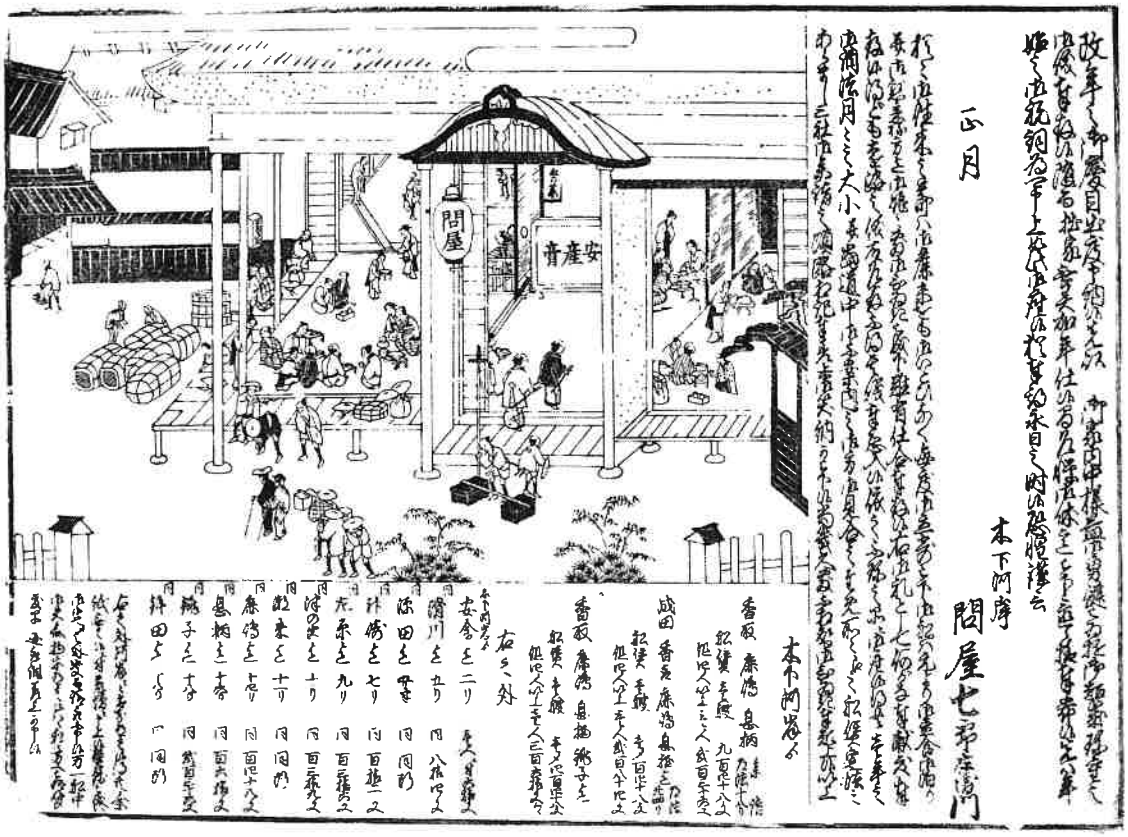


図３　木下河岸問屋引き札（吉岡重弘家文書）（印西市立木下交流の杜歴史資料センター提供）

に成田山参詣を加えたもの、次に三宮巡りに銚子遊覧を加えたツアー料金が示されている。そのあとは主要河岸場への料金となっている。一艘の船を貸し切るのに一貫文以上の金銭が必要であった。概算ではあるが、銭一文十二円と換算すると一貫文は一〇〇〇文なので一二〇〇〇円になる。他の必要経費もあるだろうから、おおむね一艘の木下茶船を貸し切るのに、現在で

行き先	運　賃（単位　文）
香取・鹿嶋・息栖	船賃１艘 948 文、但し４人以上１人 226 文
成田・香取・鹿嶋・息栖	船賃１艘１貫 148 文、但し４人以上１人 284 文
香取・息栖・銚子	船賃１艘１貫 448 文、但し４人以上１人 360 文
安食まで	１人に付き 60 文
滑川まで	１人に付き 84 文
源田まで	１人に付き 84 文
神崎まで	１人に付き 112 文
佐原まで	１人に付き 136 文
津の宮まで	１人に付き 139 文
潮来まで	１人に付き 139 文
鹿嶋まで	１人に付き 148 文
息栖まで	１人に付き 160 文
銚子まで	１人に付き 236 文
鉾田まで	１人に付き 236 文

表１　木下河岸よりの運賃（引き札より作成）

換算すると一万五千円から二万円程度の費用がかかったと考えるべきであろう。

また、木下から安食までは六〇文なので七二〇円、佐原までは一三六文なので一六三二円という値段となる。今日の交通事情と比較してみると興味深い(23)。

四　河岸の様子

船の出発する河岸の様子はどのようであったか。『利根川図志』に河岸場の様子が記されている。

> 安永八年五月、仙台徹山君の鹿嶋道ノ記に云、（前略）今日も日高く、木おろしにつきぬ。十一月木おろしを出でて、今日はひめもす船路ゆく道とほく、まづ河岸にのぞめば、こたみの旅にまうたりける船あまたつなげり。各一二の列を正してのりいだす、見る目がちなり(24)

十二艇の船が木下河岸に繋がっていると記している。また、挿絵として「木下河岸　三社詣出舟之圖」と称する図が掲載されている(25)。それが図４である。『利根川図志』がつくられた安政年間（一八五四～一八六〇）の頃の木下河岸の様子ということになる。

中央に「問屋」と書かれた家屋があるが、これが河岸問屋を営んでいた吉岡家であろう。図３の吉岡家のことである。旅行客が待つ広い座敷が確認できる。庭が広くとられており、左手につるべ井戸がみえる。その右手に石垣を少し組んでいる屋根つきの建物がみえるが、これは高札場ではないだろうか。多くの家々が立ち並ぶ木下の町を通る街道は多くの通行人で賑わっている。右側に「カハチヤ」と書かれている家屋がある。馬で荷を運んでいる者や天秤棒を持った棒手振と呼ばれる人びとの姿が描かれている。

また、馬を利用した利根川右岸の河岸から江戸川左岸の河岸

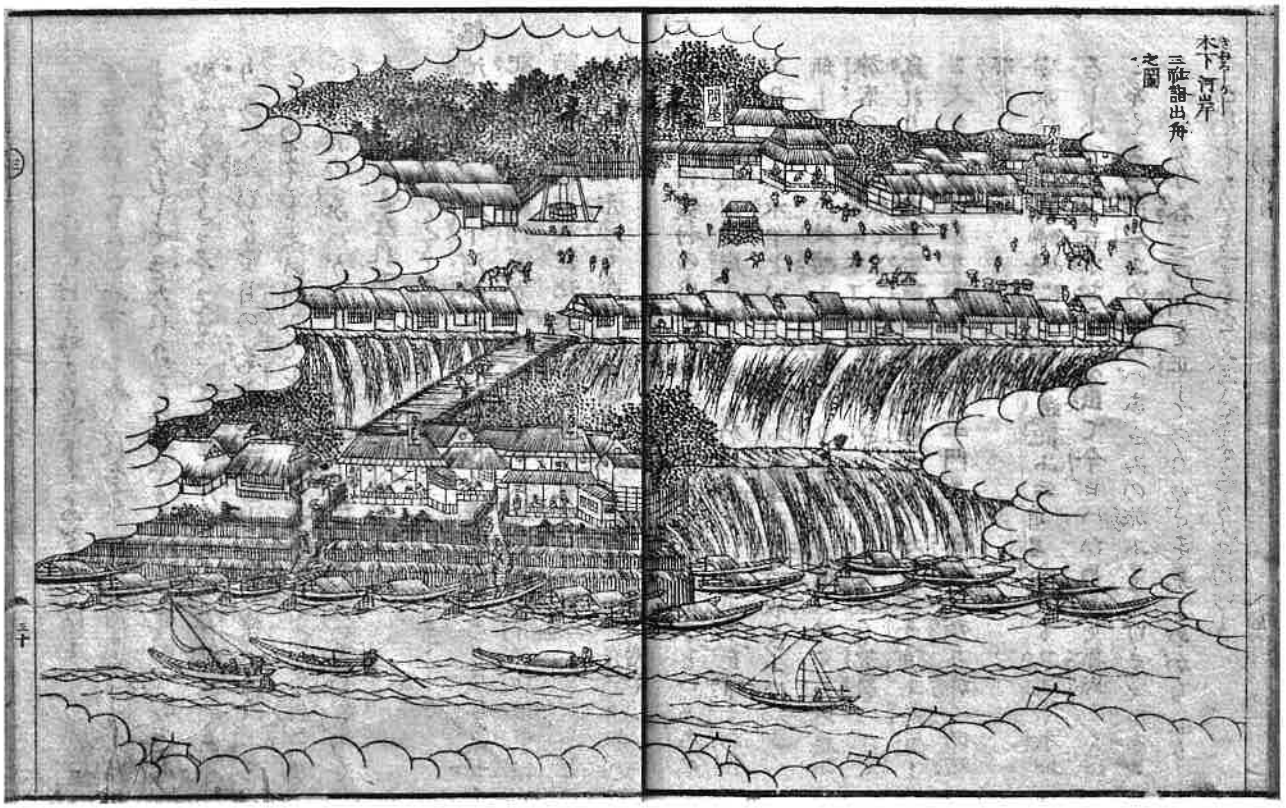


図４　木下河岸三社詣出之圖（出典『利根川図志』（千葉県立関宿城博物館所蔵））

まで荷物輸送が盛んであったことが、利根川と江戸川にはさまれたこの地域の特徴である。このため、荷を運ぶための新道と新河岸が多く生まれてきた。さらに、それがもとで荷物の争奪をめぐって河岸と河岸との間で争論が巻き起こっている(26)。

問屋の前には手賀沼からの落とし堀が流れており、そこに橋がかかっている。橋を渡ったところに土手があり、そこに家屋が建ち並び、「ミカドヤ」などと書かれた二階建ての家屋もある。これらは茶店であろうか、旅行客が縁側で座って休んでいる様子が窺える。

そこから河岸に降りる小道が河岸に続いている。河岸には、十隻以上の茶船が停泊しており、帆柱を寝かせて帆をたたんでいる船もあれば、旅行客を乗せ、帆を張って航行している船もある。帆柱を今にも立てようとしている船もある。帆柱は川に出てから立てるのであろうか。船の後方をみると川船特有の大きな舵が付いているのがみえる。航行には棹や櫓を用いており、船頭と思われる人物がこれらを持ち、船をコントロールしている様子がわかる。

五　下三宮参りの船旅の案内記

木下河岸の様子については、『木曽路名所図会』(27)に西村中和による挿絵があり、たびたびこれが紹介されることがあった。これが図5である。木下河岸にある船着き場から縦縞の着流しを着て鉢巻きをつけた船頭の指示で旅客が茶船に乗り込もうとしている所を描いたものである。乗船する場所は、橋がかかっていることから手賀沼からの落とし堀のある所である。この人工河川は利根川につながっている。しかし、落とし堀は農業に使用するもので、船の乗降には使用しない場所である。図4をみればわかるように橋を渡って利根川の岸辺に船着き場があり、ここから出発する。図4ではこの落とし堀は土手

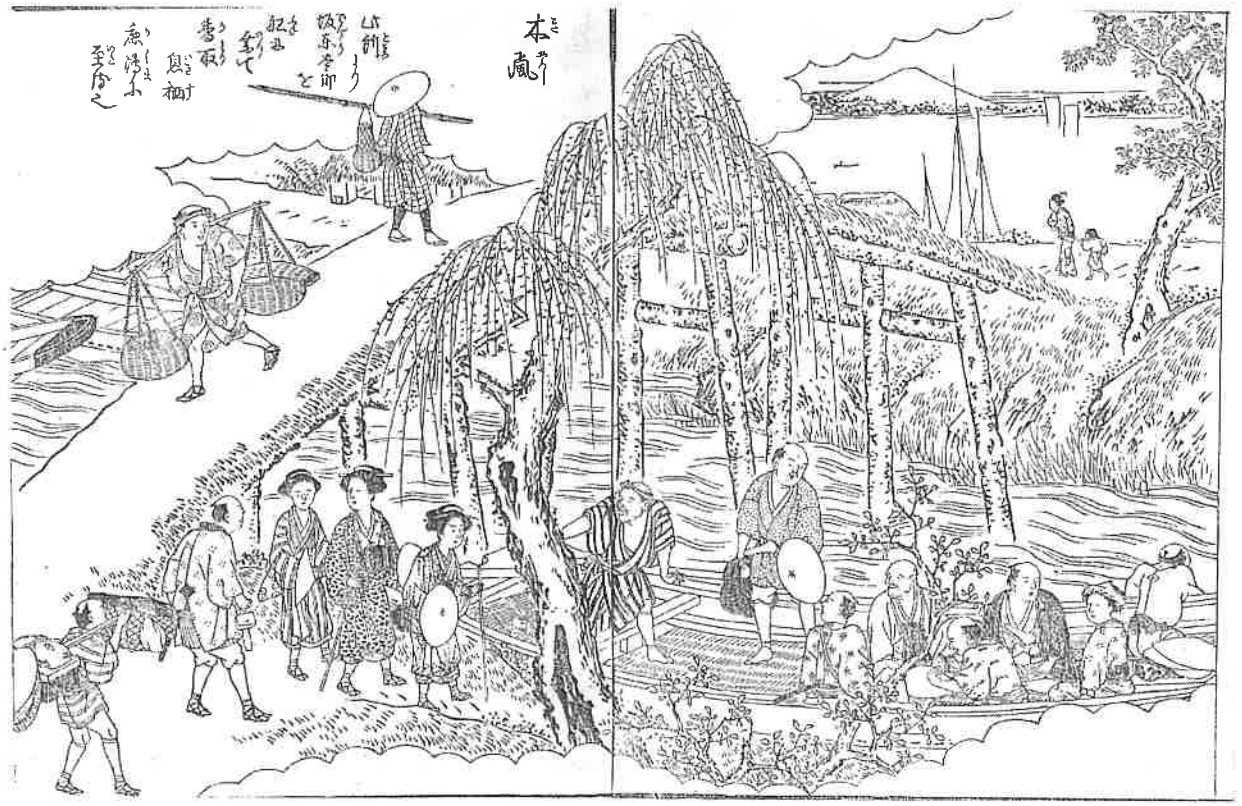


図5　木下河岸（出典『木曽路名所図会』（埼玉県立熊谷図書館所蔵））

にさえぎられてみえていない。おそらく、この挿絵を描くにあたって、西村中和が絵の構成を考えてこのようにしたのかもしれない。確かに橋の上には天秤棒を担いだ棒手振が荷を運びながらその視線の先には、木下茶船があるという魅力的な構成になっている。

著者である秋里籬島は、安永九（一七八〇）年に『都名所図会』[28]を出版して、この読本が大きな話題となり、その後、名所図会と銘打った本が各地で出版されるようになった。『木曽路名所図会』のシリーズは六巻七冊からなっている。この「木曽路」と銘打って書かれた読本に、なぜ木下河岸が登場するのかということに疑問が湧いてくる。このことについては、『木曽路名所図会』を通読してみると、第五巻の前半部は「木曽路」ではなく、江戸からの下三宮参りの旅についての記載であることがわかる。何らかの事情により本の出版事情のなかで『木曽路名所図会』の中に香取・息栖・鹿島の各神社への船旅が含まれたものと考えられる。

旅行記の行程は、おおよそ次のようになっている。

江戸日本橋ー行徳ー八幡ー釜ヶ谷（鎌ヶ谷）ー白井ー大森ー木颪（木下）ー神崎ー香取ー息栖ー鹿島

この後は、板久（潮来）、麻生、玉造と土浦方面に向かい、筑波山神社などの紹介を経てから、真壁、宇都宮、足利など北関東の名所旧跡を紹介して第六巻に続いている。

また、挿絵を加えて紹介している場所を挙げると、行徳河岸、釜ヶ原、木颪（木下）、神崎社、津宮河岸、香取神社、息栖社、鹿島磯辺一鳥井（一の鳥居）、鹿島神社、鹿島みたらし（沐浴をしている様子）、要石（鹿島神社内にある）となっている。

このルートはまさに「参詣案内記」に描かれたルートそのもので、江戸から行徳河岸に行き、そのまま木下街道を東に向かい、木下河岸から船に乗り、三社に向かうというものである。

また、神崎にある神崎神社が挿絵を加えて取り上げられているのが興味深い。香取神宮、鹿島神宮、息栖神社、そしてこの神崎神社は、これら四社の祭神が「国譲り神話」と深い関係があり、そのことで深く結びついて紹介されているのではないだろうか。紙面の関係で『木曽路名所図会』に掲載された下三宮参りの内容とともに、このことについては、後日に期したい。

おわりに

木下河岸は、旅客河岸として、江戸から多くの旅行客が集まっていたことがわかる。また、江戸から来た観光客が船を貸し切り、三宮参詣を楽しむ出発点であった。引き札にみられるように木下河岸で問屋を営んでいた吉岡家にはこうした人びとが集まってきた。

その上に、人びとだけではなく、吉岡家には、利根川流域で起こった様々な騒動や事件の情報も集まってくることとなった。吉岡家文書の「旧記」などの史料には、そうした舟運と河岸に関わった人びとが遭遇した様々な事件や騒動が多く記録されている[29]。社会史ということになろうか。今後、こうした史料を読み解くことによって河岸に生きた人びとの姿を追って行きたい。

註

(1) 赤松宗旦『利根川図志』（『茨城県史料　近世地誌編』（茨城県、一九六八年）、赤松宗旦著、柳田国男校訂『利根川図志』（岩波書店、一九七二年）、津本信博訳『利根川図志』（教育社、一九八〇年）、我孫子市史叢書『あびこ版新編利根川図志』（我孫子市教育委員会、一九九〇年）など。なお、史料の引用にあたっては、読みやすさを考え、文意を損なわないように句読点や現代仮名遣いを用いた。

(2)赤松宗旦著、柳田国男校訂『利根川図志』（岩波書店、一九七二年）一八六頁～一八七頁

(3)木下河岸については、川名登『河岸に生きる人びと－利根川水運の社会史－』（平凡社、一九八二年）、山本忠良『利根川と木下河岸』（崙書房、一八八八年）、榎本正三『河岸の人々の暮らし』（崙書房、一九九〇年）、川名登『ものと人間の文化史一三九　河岸（かし）』（法政大学出版局、二〇〇七年）、『印西市歴史読本　中世・近世編』（印西市教育委員会、二〇一一年）などが詳しい。また、史料集として『印西町史　史料集　近世編一』（印西町、一九八六年）、『印西町史　史料集　近世編二』（印西町、一九八七年）がある。

(4)『船鑑』（船の科学館、二〇一三年）

(5)『船鑑』（船の科学館、二〇一三年）三六頁

(6)川名登「関東川船の支配と構造」六〇頁（『船鑑』（船の科学館、二〇一三年）所収）

(7)『船鑑』（船の科学館、二〇一三年）二二頁～二三頁、二六頁など艫船や高瀬船には舵が描かれている。

(8)川名登「関東川船の支配と構造」五九頁（『船鑑』（船の科学館、二〇一三年）所収）

(9)「諸書附類ならびに旧記書抜」（『印西町史史料集　近世編1』（印西町、一九八六年）二八九頁）

(10)赤松宗旦著、柳田国男校訂『利根川図志』（岩波書店、一九七二年）一八六頁

(11)官弊大社とは、旧社格のひとつである。社格とは明治維新以降、『延喜式』に倣って、新たに神社を等級化した制度である。第二次世界大戦後に廃止されたが、「旧社格」などの名称で神社の格を表す目安とされる。官幣社のうちで最も格式が高いもの官弊大社であり、例えば、出雲大社、宇佐神宮などがこれにあたる。

(12)茨城県地域史研究会編『茨城県の歴史散歩』（山川出版社、二〇〇六年）二二二頁～二二三頁、『鹿島神宮参拝のしおり』（鹿島神宮社務所）

(13)千葉県高等学校教育研究会歴史部会編『千葉県の歴史散歩』（山川出版社、二〇〇六年）一〇七頁～一〇八頁、『香取神宮』（香取神宮社務所）

(14)茨城県地域史研究会編『茨城県の歴史散歩』（山川出版社、二〇〇六年）二二四頁～二二五頁

(15)『木下街道展図録～江戸と利根川を結ぶ道～』（市川歴史博物館・印西市教育委員会他、一九九八年）

(16)布佐－松戸ルートについて、筆者は勤務校の生徒とともに実際に鮮魚街道を歩いてみたことがある。この絵図のように途中まで水戸街道を使うルートではかなり距離が遠くなる。もっと短縮できるルートがある。水戸街道の一部が布佐－松戸ルートと重なっているというのは間違いではないだろうか。他にも山本鉱太郎『新利根川図志』（崙書房、一九九八年）一二四頁～一二五頁に山本氏の布佐・松戸ルートが詳細に記されている。

(17)大野政治『成田山新勝寺－民衆の不動尊信仰史－』（崙書房、一九七八年）

(18)『天狗の祈り～大杉神社と利根川水運～』（千葉県立関宿博物館、二〇〇七年）、茨城県地域史研究会編『茨城県の歴史散歩』（山川出版社、二〇〇六年）九四頁～九五頁、大島建彦「利根川流域とアンバ信仰」（『千葉県立関宿城博物館研究報告』第一二号、二〇〇八年）、『大杉神社』（大杉神社社務所）

(19)諏訪神社の現在地と案内図の比較には、『あびこ版水戸土浦道中絵図』（我孫子市教育委員会、一九八八年）、山本鉱太郎『旧水戸街道繁盛記（上）（下）』（崙書房、一九九四年）などが詳しい。

(20)『ながれやまのむかし』（流山市教育委員会、一九八九年）四三～四四頁

(21)千葉県高等学校教育研究会歴史部会編『千葉県の歴史散歩』（山川出版社、二〇〇六年）一六九頁～一七一頁

(22)三浦茂一編『図説千葉県の歴史』（河出書房新社、一九八九年）一六八頁

(23)江戸東京博物館『図表でみる江戸・東京の世界』（江戸東京博物館、一九九八年）

(24)赤松宗旦著、柳田国男校訂『利根川図志』（岩波書店、一九七二年）一八七頁

(25)赤松宗旦著、柳田国男校訂『利根川図志』（岩波書店、一九七二年）一八八頁～一八九頁

(26)松丸明弘「利根川・江戸川流域における近世交通史の諸問題Ⅰ利根川・江戸川の狭間地域における輸送機構を中心にⅠ」（『千葉県立関宿城博物館研究報告』第四号、二〇〇〇年）、松丸明弘「新道新河岸争論の分析Ⅰ布施村、木野崎村と瀬戸村河岸出入に境通六ヶ宿追訴一件を通してⅠ」（『千葉県立関宿城博物館研究報告』第六号、二〇〇二年）

(27)秋里籬島『木曽路名所図会』（一八〇五年）（埼玉県立熊谷図書館所蔵）

(28)都とは京都のこと。鈴木健一校訂『新訂　都名所図会』（筑摩書房、一九九九年）として翻刻されている。

(29)「旧記」（『印西町史　史料集　近世編一』（印西市教育委員会、一九八六年））

（まつまる・あきひろ　当館調査協力員）